

氏 名 李 長 波
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 68 号
 学位授与の日付 平成 11 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
 学位論文題目 日本語定称指示詞の歴史的研究

(主査)

論文調査委員 教授 内田賢徳 教授 山梨正明 助教授 東郷雄二

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文の研究対象は日本語の定称指示詞である。ここで言う定称指示詞とは、いわゆる「コソアド」言葉から、疑問形の「ド」を除いた残りをさす。定称指示詞は国語学において様々な角度から問題にされてきた。また近年はG・フォコニエの提唱するメンタル・スペース理論に基づいて、新たな光を当てる研究も相次いでいる。本学位申請論文は、この定称指示詞にたいして、歴史主義的立場から迫ろうとしたものである。

第一章は現在に至るまでの日本語定称指示詞の研究を概観している。松下大三郎と山田孝雄の指示詞研究に触れたあと、指示詞研究のターニングポイントとなった佐久間鼎の研究について、それまでの「近称」「中称」「遠称」という、話し手からの距離に基づく原理に代わって、人称領域と指示詞を相関させた功績を認めつつも、「ソ系指示詞」を二人称領域とし、それを文脈指示まで拡大したことにより、解決できない問題を残してしまったと批判している。以後の指示詞研究は、佐久間説を中心に展開し、その課題は主として「ソ系指示詞」の位置づけと、「中称のソ」を認めるか否かに集中した観がある。その後の渡邊実、三上章、堀口和吉、金水 敏・田窪行則、川端善明らの研究では、言語使用の「場」の概念の導入と、それに基づく「融合型」「対立型」という新しい視点が持ち込まれはしたものの、佐久間が残した問題はいまだに解決されたとは言い難いと結論づけている。

第二章は定称指示詞の機能と選択関係を具体的に論じたものである。本学位申請者は、指示とは何かという問題から説き起こし、佐久間鼎の提唱した「コ・ソ・ア」と一人称・二人称・三人称の人称領域との結びつきを認めつつも、印欧語の古い時代に見られる一人称 vs. 非一人称の対立や、英語のthis/thatや中国語などの二元対立しか持たない言語との比較に基づき、日本語のコ・ソ・アに見られる人称との相関も絶対的なものではなく、文法化の働きなどによって、その相関は緩み得ると主張している。また従来の分類では説明できない指示詞の用法を説明するために、申請者は分類の細分化を行っている。まず従来一人称領域とされた「コ」は「コ(1)」と「コ(2)」に二分される。「コ(1)」は「その本ください - この本です」に見られるように、二人称領域である「ソ」と対立するが、「コ(2)」は話し手と聞き手の間で指示領域を分割できない用法であり、堀口のいう「絶対指示」に相当する。また「ソ」は「ソ(1)」と「ソ(2)」と「ソ(3)」に細分される。このうち「ソ(1)」は「コ(1)」と対立する聞き手領域と結びついている。「ソ(2)」は「(タクシーの運転手に) そこの角を左に曲がってください」という場合の「ソ」であり、二人称領域との結びつきがもはや見られない。「ソ(3)」はソ系指示詞が接続詞「それから」「そこで」などのように文法化されていく道筋を示すものである。

また本学位申請者は、従来指示詞研究で用いられてきた概念を批判的に検討し、新たに「知覚対象指示 vs. 観念対象指示」、「照応機能 vs. 提示機能」、「対等関係 vs. 非対等関係」という概念が有効であることを示している。それに基づいて、話し手か聞き手のどちらかが優位に関わる非対等関係の「コ・ソ」にたいして、どちらも優位ではない対等関係の「ア・ソ」という捉え方を提唱した。

第三章は本学位申請論文の中心をなす部分で、上代からの日本語定称指示詞の歴史的な推移を実証的に跡づけたものである。まず上代語については、「コ」に二人称や三人称に関わる用例がないこと、「ソ」「カ」には一人称に関わる用例がなく、ともに二人称・三人称に関わる用例が併存していることから、この時代にはまだ二人称領域と三人称領域が未分化の状態にあり、一人称 vs. 非一人称の対立が基本であったとしている。そしてこの状態は上代以前の、「直接経験」を表す「コ」(近)「カ」(遠) vs. 「間接経験」を表す「ソ」の延長線上にあったと考えられることを豊富な資料をもとに示している。

次に中古語から近世前期までの時代では、「ソ」に初めて二人称に関わる知覚指示の例が見られるものの、「カ」は未だに二人称と三人称が未分化の状態にあり、この時代に「カ」と併用されるようになった「ア」にも同様の特徴が見られ、上代の一人称 vs. 非一人称が続いていることを示している。

近世後期になって明確に知覚指示において「コ」「ソ」の交替が観察され、二人称に関わる知覚指示の「ソ」の用例も豊富になる。また「ア」から二人称に関わる用法がなくなり、ここに二人称領域と三人称領域の分化が完成したと見られることを示している。

本学位申請者は豊富な資料用例の分析に基づいた論考の結論として、上代以降の指示詞の歴史は、非一人称領域に包摂されていた二人称領域が次第に自立分化し、「ソ」が二人称領域との結びつきを強めると同時に、「コ」が一人称領域と、「ア(カ)」が三人称領域との結びつきを強めてきた過程と考えられるとしている。

論文審査の結果の要旨

眼前にある事物をさす現場指示的用法にせよ、既に言及した事物をさす文脈指示的用法にせよ、日本語のコ・ソ・アのように、三つの指示詞が対立する言語はそれほど多くはない。英語や中国語のように二つしかない言語が多く、フランス語のように一つしかない言語もある。従来からの国語学でもコ・ソ・アの用法をどのように体系づければよいかをめぐって様々な議論がなされてきた。

本学位申請論文は、このようにさまざまな議論のある問題について、先行研究の懐胎する問題点を細かく指摘し、新しい視点から指示詞の体系を整理しなおすとともに、日本語の指示詞の歴史的発達を豊富な資料をもとにいていねいに跡づけた労作といえる。

本学位申請者はまず、先行研究を詳しく調査するとともに、その問題点を指摘し論じている。佐久間鼎は、「コ」を一人称領域、「ソ」を二人称領域、「ア」を三人称領域と規定し、指示詞と人称との相関を主張した。ところが一方で「ソ」系指示詞を中心として、佐久間説では説明できない指示詞の用法が多く指摘されることとなった。

本学位申請論文では、より整合的な説明原理を求めるために、「コ」系指示詞を「コ(1)」と「コ(2)」とに分け、「ソ」系指示詞を同様に三つに分けるという試みを行っている。言うまでもなくこれは説明ではなく、用法の分類に過ぎないのだが、指示詞の機能を一元的にいずれかの領域に帰属させないという意味で、より柔軟な説明を可能にする布置である。また指示詞と人称領域との相関関係の存在を否定はしないものの、その関係は一対一ではなく、より複雑な様相を呈しているという事実認識の表明でもある。

本学位申請論文の第二章では、豊富な用例に基づいて指示詞の用法を分類し、どの指示詞を用いるかの選択関係を決める要因を新たに提唱している。そのなかで注目に値するのは、従来の人称領域をそのなかに包摂するために考えられた「対等関係」「非対等関係」という概念であろう。話し手が優位に関わるときには「コ」が、聞き手が優位に関わるときには「ソ」が用いられる「非対等関係」には、従来の一人称領域と二人称領域が吸収される。またいずれも優位に関わらないとされる「対等関係」で、両者から遠を選択すると「ア」が得られ、これは従来の三人称領域に相当する。本学位申請論文における指示詞分析の独創的な点は、「対等関係」で両者から非遠を選択すると、「ソ」が得られるとした点にある。この二つめの「ソ」は、いわゆる「弛緩したソ」の用法を説明するとともに、純粹に文脈指示的用法の「ソ」を聞き手領域に帰属させる他はなかった井手 至らの先行研究の欠点を補うものとして構想されたものである。

本学位申請論文の第一章と第二章はこのように、先行研究の綿密な批判的検討に基づいて、今まで明快な説明が与えられて来なかった「ソ」系指示詞の特殊な用法にたいして、指示詞体系全体のなかで明確な位置づけを付与し、人称領域のみに依拠した説明原理に代わって新たな原理の可能性を提示した点で高く評価されるものである。

本学位申請論文の真骨頂は第三章の歴史的研究である。本学位申請者は上代以降の指示詞の歴史的变化を跡づけるために、上代・中古・中世前期・中世後期・近世前期・近世後期と時代を区分し、全部で14種類の言語資料をすべてコンピュータ上にデータベース化した。この作業により各文献・各時代における指示詞全体の頻度や、それぞれの指示詞ごとの出現率の分布などの客観的データが得られることで、研究の信頼度が著しく増したことは特筆に値する。

こうして得られたデータを基にして本論文が明らかにしたのは、上代語以前の状態として推定される、「直接経験」を表す「コ」対「間接経験」を表す「ソ」という、経験の直接性に基づく指示詞の対立から、時代が経るに従って、人称領域の原理へと移行分化して行く過程である。上代語の段階では「カ」系指示詞の発達がいまだ十分ではないという事実もあって、人称領域の分化が未発達な状態に留まっていたと推定されることを、本論文は豊富なデータを基にして示している。続く時代には、「コ」系指示詞と「ソ」系指示詞の人称代名詞への転用にも観察される如く、各指示詞と特定の人称領域との結びつきが次第に強まって行く。こうした傾向は近世後期に完成されることになるが、本論文は各指示詞の意味と用法について、綿密な考察を重ねてその過程を跡づけており、指示詞の歴史的発達の研究に大きく貢献したとすることができる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成11年2月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。